

特集2「甲状腺腫瘍の基礎と診断」

外国に行って日本に帰ってくると、なんといっても日本のお菓子の美味しさを再認識します。高級な和菓子とかだけならまだしも、100円で売っているアイスクリームの類までダントツに美味しいのです。なんでも手を抜かずにクオリティーを追求する日本人の真骨頂でしょう。甲状腺腫瘍にも似たようなところがあります。100円アイスと比較するのは失礼ですが、数はやたら多いけれどたいして危険でもないし、と一般的には多少軽く扱われています。それでも甲状腺専門医の先生方は、診療して、検査を入れて、研究のネタを収集してと、全力投球してこられました。そのような現場の先生方のマニアック(?)な努力のおかげで日本においては診療においても研究においても甲状腺腫瘍で世界をリードする立ち位置にあると思われまます。本特集はそのような一端を会員の皆様に知っていただければと思い企画しました。

それでは執筆者をご紹介します。まずは、光武範吏先生に甲状腺癌の発生原因に関して自身の研究成果を含めて最新の知見を提供していただきます。また志村浩己先生には人間ドックにおける成績について多数例を対象とした貴重な情報の提供をお願いしました。甲状腺腫瘍が見つかる頻度が増えるに従って、外科医だけでなく内科医も腫瘍の診断・管理に習熟しないといけな時代になっています。実地に役立つ解説をベテランの伊藤充先生に書いていただきました。またどうしても外せないのが甲状腺癌の病理診断が抱えるいろいろな問題点の解説ですが、甲状腺病理学の第一人者であります森一郎先生、覚道健一先生をお願いしました。また僭越ではありますが、私が甲状腺濾胞癌の分子診断法の開発状況について書かせていただいております。1, 2時間で読めると思いますので、まずは、ざっと目を通してください。おそらく、先生方の甲状腺腫瘍に対する認識が多少変化すると思います。そして気に入られましたら診療の糧として診察室に置いていただけましたら幸いです。

(高野 徹)